

# 言語感覚を豊かにする学習材としての絵本の可能性 —「絵本作り」を通して—

Possibility of picture books as learning materials to enrich  
the sense of language : Through "picture book making"

徳永加代<sup>1</sup>

TOKUNAGA Kayo

本研究では、「ことばの絵本」を活用した「絵本作り」の有効性を明らかにすることを通して、言語感覚を豊かにする学習材としての絵本の可能性について考察した。

その結果、①幼児期から親しんできた絵本を使うことにより、言葉への興味・関心を高めることができること。②「ことばの絵本」の読み聞かせにより、言葉の響きやリズムを楽しみ、言葉の豊かさに気づかせることができること。③絵本を活用した言語活動を通して、言葉を使って表現することにより、言語感覚を豊かにしていくことが明らかになった。

## 1. はじめに

小学校低学年における国語科での学習指導は、就学以前の言葉の獲得からつながっていることに視点を置き、円滑な指導を考えなければならない。幼児教育において日常的に行われている絵本の読み聞かせは、聞く力やイメージする力の促進をはじめとして様々な言葉の発達を促す。幼児期における絵本との出会いは、絵本とともに関わってくれた大人との心のふれ合いを通して言葉の世界を楽しみ創造力を膨らませ、子どもの情操、探究心、考える力、生きる力を育てていく。

平成 29 年版小学校学習指導要領「国語」の目標に「言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」ことが示されている。<sup>1)</sup> 言語感覚について『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説国語編』には、「言語感覚とは、言葉で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚のことである。」と記されている。<sup>2)</sup> 知っている語句の数を単に増やすだけではなく、語句の意味や使い方に対する認識を深めることが求められている。

言語感覚を豊かにするためには、言葉に関する興味・関心を喚起することが必要である。日常生活の中には、身のまわりの物事、季節感、会話など、言語感覚を豊かにすることにつながる事柄があり、教科書においても言葉の単元が設定されているが、さらに言葉に興味・関心を持つことができるような学習材の活用が重要になる。

子どもたちは幼児期には、絵本や物語などの読み聞かせを通して、言葉を獲得してきている。小学校低学年においても、絵本を学習材として活用した言語活動は、子どもたちが言葉に興味・関心をもって学んでいくきっかけになるだろう。物語絵本だけでなく、ことばの絵本、詩の絵本、認識絵本、生活絵本、科学絵本、写真絵本など様々なジャンルの絵本を活用したい。

本研究では、「ことばの絵本」を活用した「絵本作り」の有効性について明らかにし、

<sup>1</sup> 帝塚山大学 教育学部 准教授

言語感覚を豊かにする学習材としての絵本の可能性について考察を行う。

## 2. 絵本とは何か

### 2.1 絵本の定義

藤本（2013）は、絵本について「テキスト（ことば・文章）とイラストレーション（図像・絵）で、さまざまな「情報（多種多様なものを表す概念として用いている）」を伝達する表現媒体である。」と定義している。<sup>3)</sup>

『新・こどもの本と読書の事典』には、絵本について、次のように記されている。<sup>4)</sup>  
(引用中の下線は論者が添えた。以下同様)

絵本とは、絵とことば、「描く力」と「語る力」がからみあって、ひとつの流れを持ちながら、構築される世界である。

描くとは、この世界全体を五感で受けとめようとする力、語るとは、この世界全体をつないでいこうとする力ともいえる。

絵とことばがからみあうということは、たとえ「〇〇文、××絵」というような表記がされていようと、文字のない絵本であろうと、絵の中にもことばがあり、画面を構成する余白にもことばがあり、絵にも文にもことばがあるということだ。逆に文字も画面の中の重要な絵であるし、ことばと絵がつながれて初めて世界が見えることもある。

「絵とことばがからみあう」のように、絵本は、絵と言葉が相互補完しながら、表現されている。絵や文字の割合は、表現方法によって変わってくる。自由度が高く、インパクトのある作品が生み出されている。「絵や余白にもことばがある」ことに注目したい。読者は、絵本において表現されている豊かな言葉を受け取るだけでなく、絵や余白から言葉を想像して言葉を生み出しながら読んでいくのである。

心地よい言葉のリズムの繰り返しと鮮やかで大胆な絵と色を楽しむ絵本は、言葉に関する感覚を豊かにするうえで、非常に大きな役割を果たしている。言葉の面白さや美しい日本語を伝え、子どもの言葉と心を育むために欠かせない。

### 2.2 絵本の種類

『ベーシック 絵本入門』の目次では、絵本の種類について、表1のように分類している。<sup>3)</sup>

絵本には多くの種類がある。これらの特徴を理解して、学習材として活用していきたい。語彙指導に用いられるであろう言葉や文字を主題とした「ことばの絵本」について『絵本の事典』では、より細かに分類している。<sup>5)</sup> それらをまとめたものが表2である。

表1 絵本の種類

物語絵本	創作（物語）絵本
	昔話絵本・童話絵本
	ファンタジー絵本
	ナンセンス絵本・パロディ絵本
	文字なし絵本
さまざまなジャンルの絵本	ことばの絵本・詩の絵本
	認識絵本・生活絵本
	科学絵本・写真絵本
	仕掛け絵本

表2 ことばの絵本の分類

分類	内容	代表的な絵本
ことばについての絵本	ことばについて考えるきっかけを与えるもの	『ことば』アン&ポールランド訳：長田弘 1957年に制作された「Sparkle and Spin」の翻訳本（ほるぷ出版 1994）
	ことばの部分を取り上げたもの	音 『るるるるる』五味太郎（偕成社 1991） 『びりびり』東君平（ビリケン出版 2000）
		語 『言葉の図鑑①動きの言葉』五味太郎（偕成社 1985）
		文字 『ABCの本』安野光雅（福音館書店 1974）
		文 『さる・るるる』五味太郎（絵本館 1980） 『だるまさんが』かがくいひろし（ブロンズ新社 2008）
	言語生活	『世界のあいさつ』長新太（福音館書店 1989） 『サルビルサ』スズキコージ（ほるぷ出版 1991）
ことば遊びについての絵本	早口ことば，なぞなぞ，だじゃれ，しりとり，回文	『もじあそび』安野光雅（福音館書店 1993） 『ことばのこぼこ』和田誠（瑞雲舎 1995） 『まさかさかさま』石津ちひろ（新風舎 2000） 『しりとりあいうえお』石津ちひろ（偕成社 2000） 『おっと合点承知之助』斎藤孝・つちだのぶこ（ほるぷ出版 2003）
話しことばについての絵本	歌の絵本	『さよならさんかく』安野光雅（講談社 1981） 『けんけんのうた』（講談社 1991） 『マザー・グースのうた』谷川俊太郎（草思社 1975）
	語りの絵本 （民話の採録をベースにしたもの）	『はなさかじいさん』 『わらしべ長者』 『てぶくろ』（福音館書店）

＊表の作成にさいして、『絵本の事典』（朝倉書店 2011年）を参照した。

「ことばの絵本」は，ことばについての絵本・言葉遊びについての絵本・話しことばについての絵本の3つに分類される。言葉そのものを題材としてとりあげたもの，言葉のおもしろさに着目したもの，音声言語による言語文化を絵本化したものなど，言葉や文字が特に重要な意味をもつ。したがって，読み聞かせや声に出して読むことなどを通して，言葉の響きやリズムを楽しみ，言葉の豊かさに気づかせる教材として活用できるだろう。

### 2.3 小学校国語教科書に取り入れられている絵本

小学校低学年の指導においては，読書に親しむことに重点が置かれ，読み聞かせや自分で読むことを基にした言語活動が例示されている。「いろいろな本」の例として，絵本が取り上げられている。また，単元の教材として取り上げられるだけでなく，発展的な読書を促すために教材末や巻末付録にも絵本が紹介され，絵本の活用が有効であること

がうかがえる。

表 3 令和 2 年版小学校 1 年生国語科教科書に掲載されている絵本

出版社	教材名	書名 (作者 出版社 出版年)
光 村 図 書	きつときってかってき てきつときってかって はってきて	『ことばあそびえほん きつときってかってきて』(著者: ことばあそびの会(谷川俊太郎, 川崎洋, 郡山半次郎) 文 金 川禎子絵 さ・え・ら書房 1978)
	おかゆのおなべ	『グリムどうわ 一年生』( 斎藤洋編著 岡本颯子絵 偕 成社 2001)
	ずうっと, ずっと, 大す きだよ	「ずーっとずっと, だいすきだよ」(ハンス=ウィルヘルム 作・絵 久山太市 訳 評論社)
東 京 書 籍	あひるのあくび	『幼児がくしゅう百科絵本①あいうえおちえあそび』(巻左 千夫作 ひかりのくに 1989)
	おおきなかぶ	『おおきなかぶ』(A・トルストイ 再話 内田 莉莎子 訳 佐 藤 忠良画 福音館書店 1966)
	たべもの	『たべもの(こどもの館 78 1979 年 11 月号)』(中江俊夫 福 音館書店 1979)
	サラダでげんき	『サラダでげんき (こどものとも(302 号))』(角野栄子作 福 音館書店 1981)
	おとうとねずみチロ	『おとうとねずみチロのはなし』(森山 京 作 門田律子 絵 講談社 1996)
	スイミー【注】光村図書 では 2 年の教科書に採ら れている	『スイミー ちいさなかしこいさかなのはなし』(レオ・レ オニ作 谷川俊太郎訳 好学社 1969)
	花さかじいさん	『はなさかじいさん (講談社の創作絵本 よみきかせ日本昔 話 春の巻)』(石崎 洋司 文 松成 真理子 絵 講談社 2012)
教 育 出 版	おおきなかぶ	『おおきなかぶ』(A・トルストイ 再話 内田 莉莎子 訳 佐 藤 忠良画 福音館書店 1966)
	うみへの ながいたび	『月刊 MOE 8 月号』通巻 166 号 (今江祥智 作 白泉社 1993)
	スイミー	『スイミー ちいさなかしこいさかなのはなし』(レオ・レ オニ作 谷川俊太郎訳 好学社 1969)
	お手がみ【注】光村図書 では 2 年の教科書に採ら れている	『ふたりはともだち』(アーノルド=ローベル作 三木卓訳 文化出版局 1972)
	のんびり森の ぞうさ ん	『のんびり森の ぞうさん』(川北亮司 作 岩崎書店 1996)
学 校 図 書	おおきなかぶ	『おおきなかぶ』(A・トルストイ 再話 内田 莉莎子 訳 佐 藤 忠良画 福音館書店 1966)
	おさるがふねをかきま した	『おさるがふねをかきました』(まど・みちお作 東貞美 絵 国土社 1982)
	はじめは「や!」	『はじめは「や!」』(香山美子作 鈴木出版 1997)
	めだかのぼうけん	『めだかのぼうけん』(伊地知英信 作 渡辺昌知 写真 ポプラ社 2007)
	ろくべえまってるよ	『ろくべえまってるよ』(灰谷健次郎 作 長新太絵文研出 版 1978)
	月よに	『つきよに』(安房直子作 南塚直子絵 岩崎書店 1995)
	おんちよろちよろ	『おんちよろちよろ』(瀬田貞二作 梶山俊夫絵 福音館書 店 1993)

これらを単元の学習材として活用し、読書へとつなげることが大切になってくる。多くの小学校では、読み聞かせやブックトークによる紹介が行われている。絵本を手にとることができるように学校図書館にコーナーを作ったり、学級文庫として配架したりして、環境を整えておくことが必要である。

小学校国語教科書に掲載されている教材には、絵本から転載されたものもある。小学校1年生国語教科書（令和2年版）に掲載されている絵本は、表3の通りである。<sup>6)</sup> 物語文や昔話や神話・伝承だけでなく、光村図書では、『ことばあそびえほん きつときてかかってきて』、東京書籍では『幼児がくしゅう百科絵本①あいうえおちえあそび』といった「ことばの絵本」から転載されていることに注目したい。

小学校学習指導要領「国語」の「各学年の目標及び内容」〔第1学年及び第2学年〕に「我が国の言語文化に関する事項」として「イ長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと」と記されている。<sup>7)</sup> いろはうたやかぞえうた、しりとりやなぞなぞ、回文や折句、早口言葉、かるたなど、幼児期においても親しまれてきたであろう言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気づき、言語感覚を養う基盤を築くのである。様々なことば遊びの絵本を活用していくことも考えられるだろう。

## 2.4 先行研究における絵本を活用した言語活動の有効性の考察

大村はまは、「単元 楽しく作る」（昭和52年中学1年生）において、文字のない絵本『旅の絵本』（安野光雅作 福音館書店 1977年）を学習材とした単元を開発している。絵画のイメージをよりどころにしながら言葉を探り出す学習である。創作力を養うために、書きたくなるような題材として「文字のない絵本」を活用している。<sup>8)</sup>

遠藤(1992)は、中学校2年生を対象とした「単元 写真絵本—『なつのかわ』との出会い—短歌に挑戦—」において、文字のない写真絵本『なつのかわ』（姉崎 一馬著 福音館書店 1988年）『はるにれ』（姉崎 一馬著 福音館書店 1981年）を使って、絵を見て楽しく想像しながら、言葉を見つけ短歌を創作する学習を展開した。<sup>9)</sup>

このように文字のない絵本は、言葉を引き出す学習材として用いられている。1ページの絵や写真から読者が体験に基づいて想像しながら「見る」ことになり、言葉を探し言葉を見つけて各自が表現しながら読むことになる。言葉の発見やひらめきを大切にすることによって、言葉への関心を高めることにつながるであろう。豊かに言葉をつむぐことを通して、言語感覚を高めるのである。

本論では、このような先行研究の成果を踏まえ、言語感覚を豊かにする学習材としての絵本の可能性について、「ことばの絵本」を活用した「絵本作り」を用いて考察を行う。

## 3. 「ことばの絵本」を活用した「絵本作り」の実際

以下、論者が、小学校1年生から3年生（ダヴィンチマスタースのイベント参加者50名）<sup>10)</sup>を対象に行った「ことばの絵本」を活用した「絵本作り」の有効性について考察する。

### 3.1 「絵本作り」の概要

〔活動名〕自分の名前で食べ物絵本を作ろう

〔ねらい〕言葉に関心を持ち、思考力、想像力を膨らませ表現力を身につける。



〔学習材〕○絵本『あっちゃん あがつく たべものあいうえお』（原案：みねよう 絵・作：さいとうしのぶ 出版社：リーブル 出版年：2003 年）

○『たべものかるた あっちゃんあがつく』（原案：みねよう 作：さいとうしのぶ 出版社：リーブル 出版年：2007 年）

○巻物絵本『しりとりしましょ！ たべものあいうえお』（作：さいとうしのぶ 出版社：リーブル 出版年：2018 年）

〔活動の流れ〕90 分

- ① 巻物絵本『しりとりしましょたべものあいうえお！』を使って、しりとりをする。
- ② 『あっちゃん あがつく たべものあいうえお』の「あ」から「お」の食べ物を予想しながら読み合いを楽しみ、自分の名前の文字から始まる食べ物を考えて「○ちゃん ○がつく ○○」の○の部分に言葉を入れて、その横に絵を描き絵本を作ることを理解する。
- ③ 6 人グループになって、自分の名前の「○ちゃん ○がつく ○○」絵本を個人で作成する。学生がボランティアとして参加し、活動の補助をした。
- ④ 作成した絵本をグループにおいて読み合う。
- ⑤ 作成した絵本を全体発表し、活動を振り返る。

### 3.2 学習材として活用した絵本の特徴

(1) 『あっちゃん あがつく たべものあいうえお』

左ページにイラスト風の文字、右ページに絵という構成で 50 音プラス、濁音半濁音が楽しく学べる。巻末には楽譜が掲載されていて、歌いながら読むことができる。例えば、左ページに「あっちゃん あがつく あいすくりーむ」の文が大きく、その下に擬人化された食べ物の絵が小さく描かれている。右ページにはその食べ物が、個性豊かにストーリーを展開している。言葉のテンポがよく、歌のように読むことができるので、ひらがなが初めての子でも馴染みやすい。

「○ちゃん ○がつく ○○」のページもあり、自分の名前を使ったオリジナルの絵本を作成することもできる。声に出して読む、絵をじっくり見る、歌うと、さまざまな楽しみ方ができる。身の回りで同じ頭文字のものを探して自分の名前の替え歌を創ることを通して、平仮名や言葉の習得にも興味を広げていくことができる。

(2) 『たべものかるた あっちゃんあがつく』

「たべものあいうえお」絵本、『あっちゃんあがつく』のカルタ版。取り札も読み札もカラーで、各 69 枚ずつある。

(3) 巻物絵本『しりとりしましょ！ たべものあいうえお』

絵本『しりとりしましょ！ たべものあいうえお』のはじめの 10 見開きが拡大されている。「しりとりバス」のバス停を出発点として「アイスクリーム」⇒「むぎちゃ」⇒「やきいも」…というように、いろいろな食べ物が列をなしている。楽譜も付いているので、しりとりをしながら歌を楽しむことも出来る。巻物になっているので、大人数で楽しむことができる。

### 3.3 「絵本作り」の考察

活動の流れに沿って、考察する。

(1)巻物絵本『しりとりしましょ！たべものあいうえお』を使って、しりとりをする。

しりとりでは、前の食べ物の最後の音を語頭にもつ食べ物を口々に発表した。食べ物という身近な親しみやすいテーマであるため、全員が楽しそうに参加することができた。巻物絵本に書いてある食べ物について、例えば「むぎちゃ」なら「飲み物」「夏に飲む」など、ヒントを出しながらやり取りをした。生活経験がうかがわれる場面もあった。

「おつぎは い」のようなつなぎの部分は、みんなで声に出してリズムを取りながら読んだ。繰り返しのリズムから言葉遊びを楽しむ姿が見られた。様々な食べ物を思い出すことは、自分の名前の食べ物絵本を作る準備をすることになる。

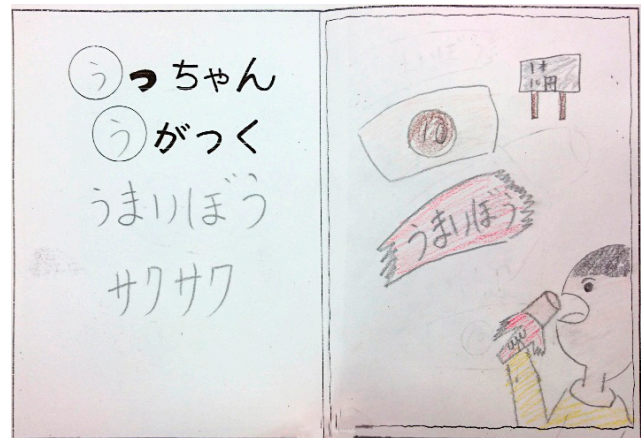
(2)『あっちゃん あがつく たべものあいうえお』の「あ」から「お」の食べ物を予想しながら読み合いを楽しみ、自分の名前の文字から始まる食べ物を考えて「○ちゃん ○がつく ○○」の○の部分に言葉を入れて、その横に絵を描き絵本を作ること理解する。

しりとりにおいて、食べ物の名前を考えることができたので、様々な食べ物を予想し、色、形、手触り、味などの言葉も発表することを楽しみ、作成する絵本のイメージはスムーズに理解できていた。

(3)6人グループになって、自分の名前の「○ちゃん ○がつく ○○」絵本を個人で作成する。

図1は、2年生が作成した絵本の1ページである。作成時には、食べ物の名前だけでなく、味や様子を表す言葉を書くように促した。「うまいぼう サクサク」「カレーからい ごくごく プハー」「ぷちぷち うみぶどう」のようにオノマトペを使って表現するものが多く見られた。最初に食べ物の絵を描いて言葉をつけた。言葉を考えてから絵を描く。どちらの場合もできるだけ言葉を引き出すことができるように、学生が「おいしそうに描けているね。どのような味かな」「食べたとき、どんな音がする」などと、質問をした。なぜその食べものにしたのか理由を語る子どももいた。

図1 2年生が作成した絵本のページ



食べ物が思い浮かばない子どものためにヒントカードとして『たべものかるた あっちゃんあがつく』を活用した。擬人化された絵を見ることによって、イメージを広げることができたようである。例えば、かるたの「やきいも ふかふか」という表現をヒントに、1年生は「ほくほく やきいも」2年生は「やきいも ほかほか プー」と考えた。自分なりのものの見方を表現しているといえよう。

(4)作成した絵本をグループにおいて読み合う。

作成した絵本を読み合うことを通して、「いちごパフェ あ〜ん」「きんかん あまい」「ゆず すっぱい」「ロールケーキ まきまき」「ここあ ほかほか」「さかな ぴちぴち」

「さかな ふにゃふにゃ」のように様々な表現に出会い、言葉にも絵にも物語があることを実感したようである。

(5)作成した絵本を全体発表し、活動を振り返る。

子どもたちは個性豊かな作品から言葉を使って表現する楽しさを感じ、もっと作りたいと意欲を示していた。「自分の名前の食べ物を考えるのが楽しかった」、「食べ物の味を思い出して言葉を考えた」、「きゅうりを食べたときの音を『ぱりぱり』にするか『ぼりぼり』にするか迷った」と感想を述べていた。言葉の響きやリズムを楽しむことができ、言葉で表現する際の正誤・適否について考えていることがうかがえる。

このように、子どもたちは言葉を使って表現することを通して、言語感覚を磨いていく。言語感覚を豊かするために、「ことばの絵本」を組み合わせ活用することは有効である。

#### 4. まとめ

言語感覚を豊かにすることは「ものの見方、考え方、感じ方、表し方」を広げ深めることにつながる。学習者と言葉を豊かに出合わせ、言葉への自覚を高めていくことができるように、教師自身が常に言葉や言語表現に関心を持つことが肝要である。

本論では、小学校において言語感覚を豊かにする学習材としての絵本の可能性について考察した。

その結果、次の3点が明らかになった。

- ①幼児期から親しんできた絵本を使うことにより、言葉への興味・関心を高めることができること。
- ②「ことばの絵本」の読み聞かせにより、言葉の響きやリズムを楽しみ、言葉の豊かさに気づかせることができること。
- ③絵本を活用した言語活動を通して、言葉を使って表現することにより、言語感覚を豊かにしていくこと。

小学校においては、国語科以外にも絵本を学習材として活用した学習活動は行われている。例えば、図画工作において絵本を読んだ感想を「読書感想画」に描かせる、理科の導入に科学絵本を見せて課題を考えさせる、外国語活動において英語の絵本の読み聞かせをするなど、全ての教科で活用されている。これらを踏まえて、さらに学習材としての絵本の意義と可能性について、次の2点について研究を深めたい。

- ①学年や教科ごとに学習活動に使える絵本を検証する。
- ②絵本を活用した学習活動について開発する。

#### 注

- 1) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)」p28
- 2) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編」p13
- 3) 生田美秋・石井光恵・藤本朝巳編著(2013)『ベーシック 絵本入門』ミネルヴァ書房  
さまざまなジャンルの絵本に「教材としての絵本」が分類されていたが、絵本の活用方法のことであるので、入れなかった。
- 4) 黒澤浩・佐藤宗子・砂田弘・中多泰子・広瀬恒子・宮川健郎編(2004)『新・こどもの本と読書の事典』ポプラ社 p29



- 5) 中川素子・吉田新一・石井光恵・佐藤博一編(2011)『絵本の事典』朝倉書店 pp. 321-322
- 6) 『こくご一上 かざぐるま』『こくご一下 かざぐるま』光村図書  
『あたらしいこくご一上』『あたらしいこくご一下』東京書籍  
『ひろがることば しょうがくこくご一上』『ひろがることば しょうがくこくご一下』教育出版  
『みんなとまなぶ しょうがっこうこくご いちねん上』『みんなとまなぶ しょうがっこうこくご いちねん上』  
学校図書
- 7) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)」p29
- 8) 大村はま(1982)『大村はま国語教室』第1巻 筑摩書房 p. 519
- 9) 遠藤瑛子(1992)『ことばと心を育てる—総合単元学習—』溪水社 pp. 69-108
- 10) ダヴィンチマスタースとは、一般社団法人ダヴィンチマスタースが主催する小学1年生～3年生の児童とその保護者を対象に実施する理数系とアート・コミュニケーションのプログラムを提供するイベント。児童に対しては、遊びから学び、楽しみながら興味を持たせるプログラムを提供し、自発的な学びを引き出し、理数分野への関心や体験からの学びを得てもらうことを目的としている。

## 参考文献

- 石井光恵編著(2015)『絵本学講座2 絵本の受容』朝倉書店
- 小川恭子・駒形武志(2017)「幼小連携を視野に入れた国語教育について—絵本を題材として—」  
『藤女子大学人間生活学部紀要』第54号 pp. 81-89
- 鈴木千春・永田智子(2017)「学校教育における教材としての絵本活用の意義と可能性」『兵庫教育大学学校教育学研究』第30巻 pp. 159-165,
- 高野浩(2018)「新「幼稚園教育要領」における領域「言葉」の学びの内容と課題—言語文化の視点から—」『千葉経済大学短期大学部研究紀要』第14号 pp. 55-62
- 津田智史(2022)「小学校国語科におけることばの教育に関する研究(3)—オノマトペを楽しみ、理解を深める活動—」『宮城教育大学紀要』第56号 pp. 139-150,
- 中川素子編著(2014)『絵本学講座1 絵本の表現』朝倉書店
- 橋村晴美(2018)「領域「言葉」における言葉の感覚が養われる教育方法についての一考察—学生の絵本の選書から見てきたもの—」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究』第3巻第2号 pp. 19-28
- 原田大樹(2016)「保育内容「言葉」と小学校国語科との接続」『福岡女学院大学紀要・人間関係学部編』第17号 pp. 69-74
- 松本猛編著(2015)『絵本学講座3 絵本と社会』朝倉書店
- 三好伸子(2019)「言葉の多様性に対応する保育者養成のための授業課題の提案」『甲南女子大学研究紀要I』第55号 pp. 97-106
- 森川拓也(2018)「領域「言葉」から「小学校国語」への展開についての考察—幼保小接続の視点から—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第17号 pp. 175-191
- 森川拓也(2020)「絵本を論理的・構造的に理解することについての考察—絵本を国語教材に用いる意味—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第21号 pp. 139-155
- 山田梨紗子(2020)「絵本を教材として用いる意義—絵本の良さを生かした授業実践の検討—」『山形大学大学院教育実践研究科年報』第11号 pp. 120-127
- 横田由紀子・鈴木ゆみこ(2018)「豊かな言葉や表現につながる絵本の選択について：オノマトペ絵本を中心に」『札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部紀要』第48号, pp. 91-102